



映画監督

三池 崇史さん

今月のインタビューは、映画監督の三池崇史さんです。度肝を抜くバイオレンスと時にユーモラスな演出でカンヌ国際映画祭の常連となり、クエンティン・タランティーノ監督も絶賛する“世界の三池”。映画監督になるまでの自称「底辺」からの半生、バイオレンスとは何か、について大いに語っていただきました。

聞き手・構成：坂 仁根、小峯 健介、菅原 草子
写真撮影：坂 仁根

——今年のカンヌ映画祭に選出された「初恋」、試写会で見ました。「さらばバイオレンス」と新聞等でおっしゃっていましたが、冒頭、いきなり生首が飛びました。

とんでもないバイオレンスな男たち、女たちがからみ合い、結果として一つの恋を残した。彼らとの出会い、若い男と女が恋に落ちるプロセスというのは、誰一人欠けても違う局面になったんだろうと。誰も意識しないところで誰かの人生にかかわり合っている、そういうことなんですよ。

—— 珍しく希望の持てるラストでしたけど。

Vシネマ（レンタルビデオ専用映画）を撮っていたころから、ほかの作品では主人公にならないような人間、いわゆる社会的にクズと呼ばれるような人間たちを撮ってきました。彼らの個人的な諍いのエネルギーでもって、地球の半分ぐらいは壊れるぞ、みたいな。時代を変えたり、国を動かしたりするのは、そのときのトップにいる人間たちですけど、名前さえ誰の記憶からもなくなってしまうような、そういう人間たちが実は動かしているというふうに、何か思いたいです。

——あまり幸せでなさそうな人たちの中にこそ本物があるんじゃないかということなんでしょうか。

人間の性^{さが}として、どうしても相手が目の高さにあるか、上にいるか、下にいるかというふうに分けてしまいますよね。自分はずっと見上げて生きているという意識が、子供のころからありました。コンプレックスとかそういうものだと思うんですけど、普通だとそれが人によっては向上心として、何とか上に上がってやるぞと努力したりする原動力になったりするんですけど、自分は怠け者なんですよ。子供のころからクラスで成績がふるわなくても、そこが自分の居場所だろうということで、努力しない。努力して乗り越えて、何かつかんだという成功体験をあまりしてこなかった人間なんです。

——映画の世界に入る前に、随分いろいろ挫折を経験されたとか。

小学校1年生のときの将来の夢って、溶接工でした。アセチレンを出して仮面風のマスクをするんですけど、それがウルトラマンとかそういう系に見えたんでしょうね。それが中学校でラグビーをひよんなことからや

ることになって。試合前は怖いんですけど、モールでがっとう巻き込まれて上も下も分かんないようになって、痛いなと思ってふっと立ち上がったときに別の人間なんです。変身しているような、そういう子供じみた興奮があったんです。で、強豪の大阪工大高校に入ったんですけど、最初の練習で完全に悟りました。だめだ、こいつらには勝てない、と。彼らは痛みに対して恐れも何もないんです。血の混ざった痰を吐いて、おっ、病気やな、って笑っているんですよ。普段から努力しない人間なので、こいつらに勝ってやるという発想にはなれず、2か月くらいでやめました。

——次はオートバイ。

17歳で免許を取りました。でも、サーキットへ行ったら走ったら怖いんですよ。マシンの限界を出して走っている速いやつが前にわーっという、危なくて抜こうと思わない。誰よりも速く命がけで走るのは、自分には無理だと。

——それから横浜の映画専門学校に入った。

「大学落ちたら横浜放送映画専門学院」ってラジオから流れてたんです。ところが最初の授業で、当時の映画の大巨匠が教室にがっとう入ってきて、黒板に「脚本とは芸術である」とでっかく書いたんです。その瞬間、しまった、俺の考えていた学校と違う、と思いました。

——どういうふうに違ったんですか。

映画は芸術という感覚じゃなかったんですよ。エンターテインメント、娯楽。映画が好きになったきっかけは「燃えよドラゴン」のブルース・リーでしたから。ぞわっとするものを感じて、映画って面白いな、って。それがいきなり脚本とは芸術であると書かれたので、かなりショックを受けて、学校にもほとんど行かず、ディスコでのバイトに明け暮れていました。

——それから助監督の仕事にいきなり飛び込んだ。

テレビドラマを作っていた学校の先輩が「ギャラは払えないが現場を覚えられる。学校に来ていないやつ

を紹介してほしい」と、学校に相談に来たんですよ。で、俺のバイト先にやってきて、現場に行くことになった。

何も分からない状態ですよ。学校でも教わってないし。監督になるのが目標じゃなくて、ぐちゃぐちゃになった現場をがっとう力業で進めていくのが助監督の仕事。止まらない。雨が降ってもやめない。工夫する。そうせざるを得ない状況でぐわーっと動き出すと、ほかのいろいろなものとまた違って、解放されているんです。挫折とかから。

女優さんが、靴について、同じ物の赤がいいと言う。明日までに用意しないといけない。メーカーに言っても、そんな色はない。でも、調べると2年前にそれが出ている。お客さんリストを教えてもらったりして、何とか赤の靴を用意する。こんな作業、何の役にも立たないですよ。その女優さんが、ありがとうと言うだけ。もう目先のことで、がーっとやるのが山ほどあって。実際、家に帰って寝る時間は2、3時間ですよ。そんな勢いで10年間ぐらい助監督を続けました。

——激しい現場だったんですね。

例えば、映画会社は映画を作りたいんだけど、テレビを作らざるを得なくなるわけです。だいたい2クール26本でというシリーズで入るんですが、1話目を始めたところで映画会社のスタッフが、会社に対して文句を言うんです。こんなスケジュールでやれない、そもそも俺たちはテレビをやりたいくない、とか。会社員なのでやってもやらなくても給料は変わらないわけですから、こんなのやっていたらダメだと言って、1話目でシリーズの半分ぐらいのものすごい予算を使っちゃって、だからといってやめちゃうわけにもいかない。そこで我々フリーのスタッフの出番になるわけです。要は、何でもやるやつら。映画はこうやって作って、監督はこうなるんだとかということから学んだわけじゃなくて、現場で人はどうやって動いて何をすればいいのか、「町場」と呼ばれる映画の最底辺で学びました。町場のスタッフという、何か目に見えない層があるんです。

——映画監督としての出発点はVシネマ。

映画の人はVシネマもやりたがらないです。僕はもう全然関係ない。映画も何も関係ないし、こんなじゃやれないよと言っている人たちの作っているものを見て、面白いとも思わなかったの。

そうこうしているうちに、映画会社がどんどん社員の首を切って、映画界で悠々としていた人たちがいなくなっちゃったんです。上が空いたの、我々がやるしかなくなってくるんですよ。そういう中でVシネマという流れができて、監督になっていった。自分が切り開いたというよりも、自分は与えられた場所で明日の仕事、今日の仕事に集中しているうちに、どんどん上の景色、何か天井がなくなっていったんです。見晴らしいいな、星が見える、みたいな。星に近づく必要はなくて、下にいても星さえ見ればいいんです。少々上にいっても、しょせん届かないわけですから、同じことだなのというのが自分の感触なんですよね。

——監督として心掛けていることは。

自分自身をあまり出さないというか、受け皿になろうという気持ちでいます。そういう性格なんですよね。

どうしても監督って、自分がこう思うので、こうだと押し付けるイメージがありますよね。多くの先輩たちを見ていると、こういう作品を作って、自分はこんな人間だ、こんな監督だと人から思われたいので、そうであるように振る舞っている。結局ノーを出す人、だめを出す人、基本的には否定する人になってしまうんです。この脚本はここが面白くない、この台詞はだめだとか、この予算ではできないとか。何に対してだめを言うかということで自分を主張してるんですが、だいたいがそこで力尽きているように自分には見えんですよ、助監督のとき。目的をもうそこで果たしちゃって、でき上がった作品にはもう何にもない。ただ、なろうとした人たちが自分の能力と違うものを使って、なろうとした夢の残りがすみたいなのが上映されているように感じていました。唯一今村昌平という監督だけは、すごいな、この人は違うなと思いました。

——ご自身で見た映画よりも、撮った映画の方が多いという伝説がありますけど、本当ですか。

ひょっとすると、そうかもしれない（笑）。「燃えよドラゴン」だけは何十回も見ましたけど。

——実は今回、こちらで勝手に設定したテーマは、法とバイオレンスなんです。バイオレンスは、一言で言ってしまうと、どういうものなのでしょう。

不思議なもので人が作る小説にしても、舞台にしても、何か基本的には悲劇を描きますよね。バイオレンスを描きますよね。穏やかな日常を描いた小説ってそんなにないんじゃないですか？ 例えばCGの技術で穏やかな風景を作っても、うそっぽさこそ感じて、ああ、きれいだと思わないですよ。最先端の映像技術が表現しているのは、楽園を描くより、主に破壊です。ビルが壊れていくさま、ゴジラが街を壊していくさま。ゴジラが何か苗を植えて草木を育てていく絵って、全然面白くないですよ。

何だか分からないけど、何かそういうものを求める、求めてしまうものが、たぶん人間の中にある。それは、いろいろなレベルはあると思うんですけど、そういう悲劇を描くことで、何事も起こらない穏やかで退屈な日常を幸せと思えるようにしたいということも、あるのかも分からないです。普通だと退屈だなと。

絶えたことがないですよ、バイオレンス映画は。日曜日の夜、大河ドラマで家族が見るものも、だいたい殺戮とか裏切りのお話ですよ。戦国時代の信長でいうと、来週はいよいよ本能寺の変か、何かぐわっと壊れていくさま、野望が崩れるさま、そこでどんな台詞を言うんだろうとか、そこに魅力を感じてしまう。日常においてもそれを求めているというのは、何か性^{きんぐ}というか本能に根差している。男の子と女の子が初めて恋をして告白し合うシーンよりも、知らない人間がすれ違いざまに何かトラブルになって殴り合うシーンの方が、作っていて楽しいんです。

でも、バイオレンスシーンというのは、愛情の固まりなんです。決して怪我しないんですよ。ひどいシーンに見えても。

——あれだけ首とかが飛んでいても。

ほぼない。あるテンションに入ってアドレナリンが回ると人間の能力は高まって、普段だと怪我するようなことも、ぎりぎり回避できるということは確かにあるんです。

負ける方は相手をできるだけ強く見せてやろうという愛情が、そのシーンに役割としてあるわけだから、へなちょこパンチが来ても、すごいリアクションをとってあげるわけです。それは相手を強く見せてやろうという愛情です。もうちょっと工夫すると、もっと痛く見えるぞ。アクションが下手な子は、こうやって撮ってあげると、強そうに見えるぞとか、それも愛情なわけですね。バイオレンスシーンと愛情って裏表なんです。愛情がないと痛みのあるバイオレンスシーンは生まれてこない。

家族を守ろうという愛情がないと、襲ってきた人間とのバイオレンスはないですよ。よりよくなろうと思って人は戦うし、より穏やかなところにいこうと思って戦う。そこには何かを守るとか、誰かが好きなので何か起こったときにはそのために戦う、そういうことを繰り返している。みんなの愛情が薄まって、まあまあそういうことですよ、いいんじゃないかなと思ったら、まあまあそうみんな熱くならずになったら、バイオレンスはなくなります。でも、気持ち悪いですよ、たぶん、その世界って。にせもんじゃないのかと。ずっと底辺から上を見ているから、何か上にあると、だいたい裏しか見えない。

——今やカンヌに最も多く作品が選出された日本人映画監督の一人。

助監督やってたとき、監督になる気もなかったし、なれると思わなかったんです。ただ、バブルの残り香があるころVシネマというものが作られ出したときに、映画の監督とかテレビの監督とかは、こんなじゃ作品にならないよとか、映画というのはこうやって、台本をこうやって作るんだよとか、うるさいことばかり言うんです。そこへ、昔映画をやりたいかったんだけど、家業を継いで成功して今は自分の好きにできるお金があってという人たちが、Vシネマなら作れるという

ので参入してきた。

その人たちからすると、プロの映画の人は何の役にも立たない人だったんです。偉そうに言うし、うるさいだけで、でき上がったものを見ると、つまらない。そういう人たちが、お前、撮れるんじゃないのと言い出したんですよ、俺が助監督のとき。何本もすぐ作りました。日本の映画の人たちはVシネマを冷たく見えていました。映画でもないし、注目もしないし、見もしない。レンタルビデオ屋さんにあるだけ。それがたまたま、海外の映画祭の人の目にとまる作品が何本かあった。カンヌに行った『極道恐怖大劇場 牛頭』とか。こっちではVシネマですけど、向こうではフィルムになっている。「どうも海外で評判がいいらしいよ、あいつ」となって、映画会社からも仕事が来るようになったんです。映画会社の人が監督にしてくれたわけじゃないんです。

——弁護士を主人公に映画を撮るとしたら、どんな映画になりますか。

知能もあって、法も知っていて、しかも、昔体を鍛えていて、格闘技のセンスもあって、ものすごく強いし、理論的に武術というのでも理解できるし精神でも超えられる。一瞬のうちに上達していった。でも、その活力、源になっているような恨みとかあるけれども、基本的には正義。自分の中で。それを武器に戦って、大混乱に陥る。秩序はもたらさない(笑)。

——結局、大混乱になってしまう。

秩序を守ろうとして、結果、大混乱に陥ってしまう。大混乱の後、何かふと新たな次元みたいなものが見えれば、と思います。

プロフィール みいけ・たかし

1960年生まれ。大阪府八尾市出身。描く映像世界は海外からも高い評価を受けており、ヴェネチア国際映画祭で『十三人の刺客』(2010)が、カンヌ国際映画祭で『一命』(2011)と『囃子の橋わたるたて』(2013)がそれぞれコンペティション部門に選出。ジャンルを問わず精力的に映像制作を続け、作品本数は100を超える。市川海老蔵と組み『六本木歌舞伎』も手掛けている。主な作品:『クロウズZERO』シリーズ(2007/2009)、『悪の教典』(2012)、『土竜の唄』シリーズ(2014/2016)、『ラプラスの魔女』(2018)など